

新たな移入種 ヒゲガビチョウ – 四国山奥の隠者 –

○片岡宣彦 (株アクションプラン)・梶田学・梶田あまね (日本鳥類標識協会)

ヒゲガビチョウ *Garrulax cineraceus* は、中国南部からアッサム地方南部にかけて分布するチメドリ科の種である。「ヒゲガビチョウが四国に生息している」という話は数年前から聞かれるようになったが、その形態などについて詳しい情報はほとんど公表されていない。そこで2004年から調査を開始し、2006年に2個体のヒゲガビチョウを捕獲、形態を詳細に調べることができたので報告する。

捕獲されたのは高知県南西部の標高約650mの尾根部にあるモミ、ツガが混じる常緑広葉樹林で下層にはソヨゴ、アセビなど常緑低木が繁茂していた。ササ類は全く認められず、尾根部以外は若齢ヒノキ植林地であった。2006年8月4日に捕獲された2個体は、頭骨の気室化が完了していることから昨年以前生まれの成鳥であると判断された。また、風切羽、尾羽、体羽の換羽が進行中であることから繁殖をほぼ終了し、換羽期に入っていると推測された。うち1個体は捕獲時に囀っているのが確認されたので♂の可能性がある。捕獲された個体の翼は円く短く、初列風切の突出はほとんどないため長距離の飛翔には適していないと推測された。尾は長めで、長短差の大きい円尾。ふ蹠は、このサイズの鳥としては長め。嘴は太く頑丈で、頭骨に対して少し上向き加減に付いているように見え、独特の顔つきをしている。本種は3亜種に分類されており、最も西に分布する基亜種 *G. c. cineraceus* は、羽色全体が淡色で、頭部に赤栗色部がない。中国南西部に分布する *G. c. strenuus* も前亜種よりもやや濃色であるが、頭部の褐色部は比較的淡色で不明瞭である。これに対し中国南東部に広く分布する *G. c. cinereiceps* は、全体に濃色で頭部の赤栗色部が明瞭である。今回捕獲された個体は、頭部の赤栗色部が明瞭であることから *G. c. cinereiceps* である可能性が高いが、現在野生化している個体が全てこの亜種に同定されるのかについては、さらに詳しい調査、検討が必要である。なお、これまでに四国内で観察、撮影された個体は、いずれも今回捕獲された個体とよく似ている。

本種はいくつかの点で生態のつかみにくい鳥である。藪を好む点は、他のチメドリ科移入種 (カオグロガビチョウ、ガビチョウ、カオジロガビチョウ、ソウシチョウ) と共通しており、囀りを頼りに接近できてもなかなかその姿を確認することはできない。動きも活発ではないのか、囀らなくなるとその姿を見つけることはさらに困難となる。またその囀りはガビチョウのものと似ており、ガビチョウ生息の可能性を考慮すると、囀りだけでの生息確認は慎重にならざるを得ない。生息地が、ある程度標高のある山地に偏っている上に、けっして鳥類相の豊かな森ではないことも発見を遅らせる要因となっているように思える。

ヒゲガビチョウは、現在までのところ日本では四国からしか記録がないようであるが、その起源も含め詳しい報告はなされていない。本種の調査は最近ようやく始まったばかりで、生態や分布についても分からないことだらけである。そのため、日本の生態系にどのような影響を与えるのかは全く分からない。すでにかかなり広い範囲に分布していると思われることから早急な生息状況調査が望まれる。